

孫本拾遺信長記  
前篇  
九

特別  
13  
2507  
9



遠  
2507  
23-9

繪本拾遺信長記初篇卷之九

目録

信長再攝州後白之事

信長勅と蒙りて美熟番と切しむ

珍本を幸天王寺の陣に所懸る

予幸壽計小回の軍兵と信信うん

先身軍義味方の勢と助く

下辻村助討死之事

小回勢被並ハケ村乃田瓜刈



下村助討丸

本願寺領城石園事

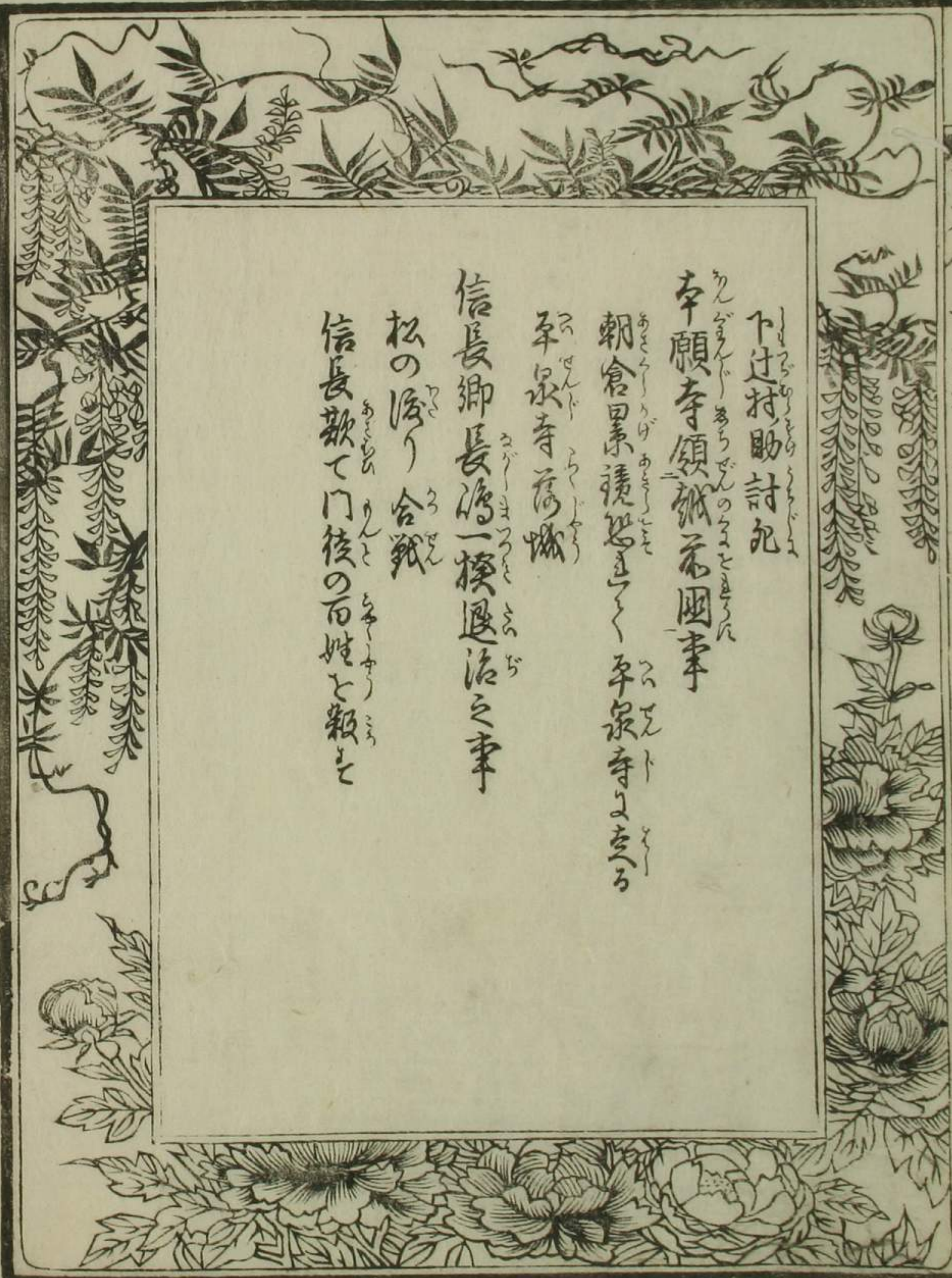
朝倉景鏡等とて平泉寺より

平泉寺を城

信長御長治一揆退治之事

松の原の合戦

信長歎て門徒の百姓と頼と



繪本拾遺信長記初篇卷之九

信長再撰州後向之事



天正二年の春信長撰州後向の備へありしが然と其事を披  
露せしむに只何とありと信長も亦不意に責めせ抑居らん  
計略とこそゆへたる三月十二日岐阜と出立ありて同十七日入洛せ  
らば幕内と遂に入京し十八日勅使ありて信長と後三後参議と  
叙せしむに教養の軍功と稱し給へし時信長奏言して東大寺  
の黄髮番と代んりてを教へ抑け名番と申しに重臣天皇の  
御宇唐朝の天皇我國へ移り石の番なりけ天皇は東大寺へ  
寄附し給ひ別より号と蘭者侍と賜ふ則東大寺の三寺を香  
名の中より選りて其名と改し給へり先より東山慈照院義政とけ



信長勅と世多  
黄熟香  
を  
むら

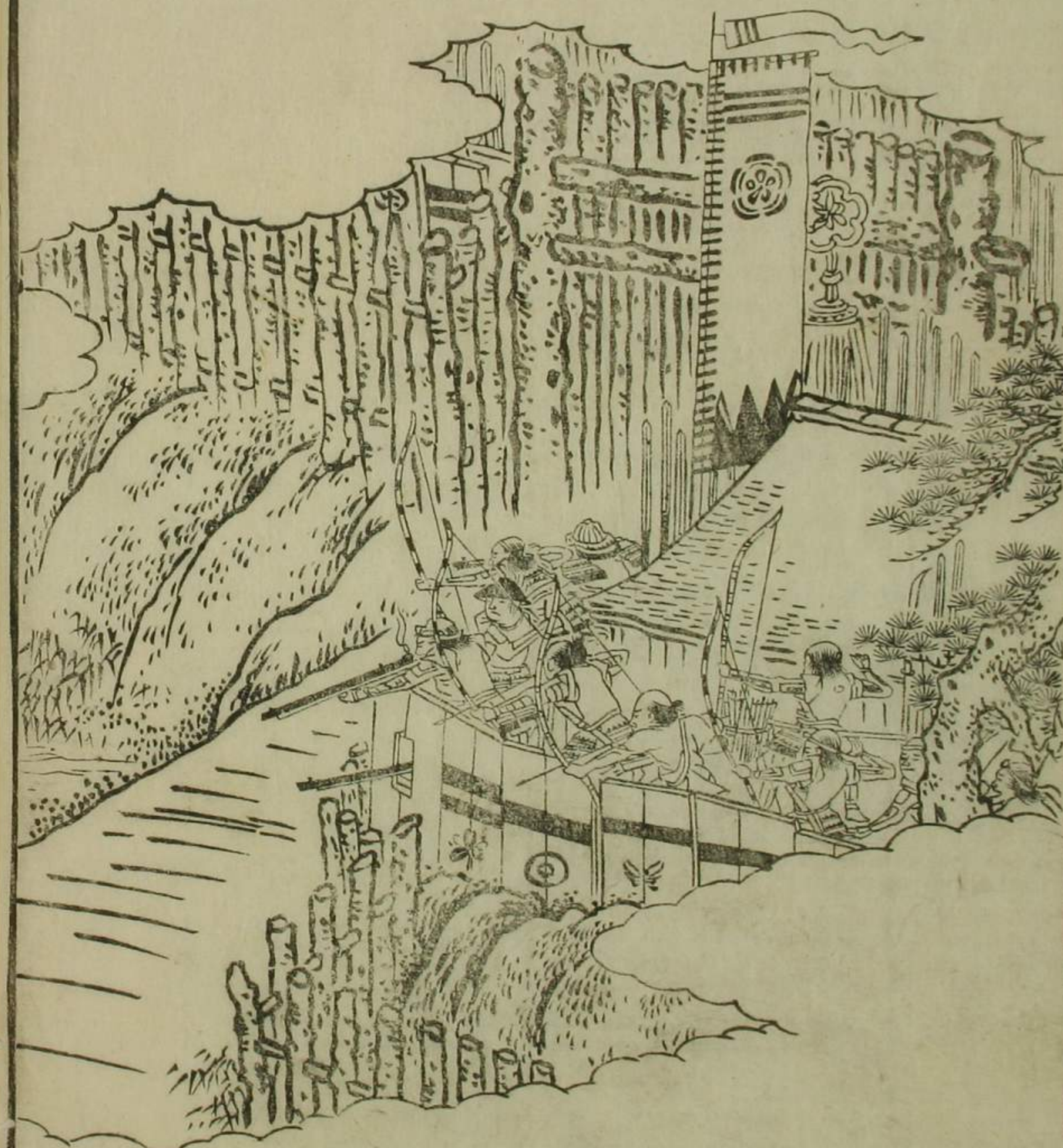
信長勅と世多

信長勅と世多

香と不承りもく後の中うの海はし空へざりしは信長郷の奏聞  
 又速に勅許ありて日月廿六日ほど納言輝資郷能多中  
 納言雅教郷と勅使として赤木守とをいとも一室を備へて前  
 奏侍とをいし給ふ信長郷よりの中郷にして多々同右諸門射  
 柴田御進進を又即右諸門或は夕彦松井友則兵出でて旧例  
 まうせ一寸八分を切立せ給ふ是ぞ小田家末代との規模と信長  
 深く怒と附せしきまより信長軍兵と引率し松永輝正少弼  
 久秀が居城多門の城を強き暫く安んずるは諸門にて日月三日俄に  
 諸方へ掃蕩し或は摂州中教寺に押寄らる一より松永輝正少  
 弼は右諸門依り守り給ふ是れ多々尾右近池田丹波守多々同右  
 諸門射明智十太夫等三万余人竜田城と經て安部郡天王寺に

陣を布一より荒本攝津守六万余人尾張に又一より尾張即  
 九諸門依り内苑夕二万余人長柄尾より押出れ柴田輝正即三  
 万余人身上は陣して大なる信長郷の旗本の軍二万余人佐々木陣を  
 右より進み搦手搦し合せに方より美濃なる用多し山河は荒  
 人馬の足も大地を動し難しとも云ん計りなうり石山の城申  
 には盡く覚悟のつるれはしと雖も同く余の大軍とに方より引受  
 矢以の敵は弓矢炮をそ射倒し柵原と進む敵をば大石と射し大木  
 を打ちけあひ給と雖も美濃なる守中法を改めし防ぎしは信長  
 の大軍十八日が同屋敷同く美濃なるも元来石山要路と云ふの勝  
 地より小軍師を率謀計をめぐりし中同法橋教龍其多々守の多  
 しく軍法は違しぬまは防りく一守を加へ或は口と開いて切て出

天  
 王  
 寺  
 乃  
 津  
 石  
 在  
 此  
 也

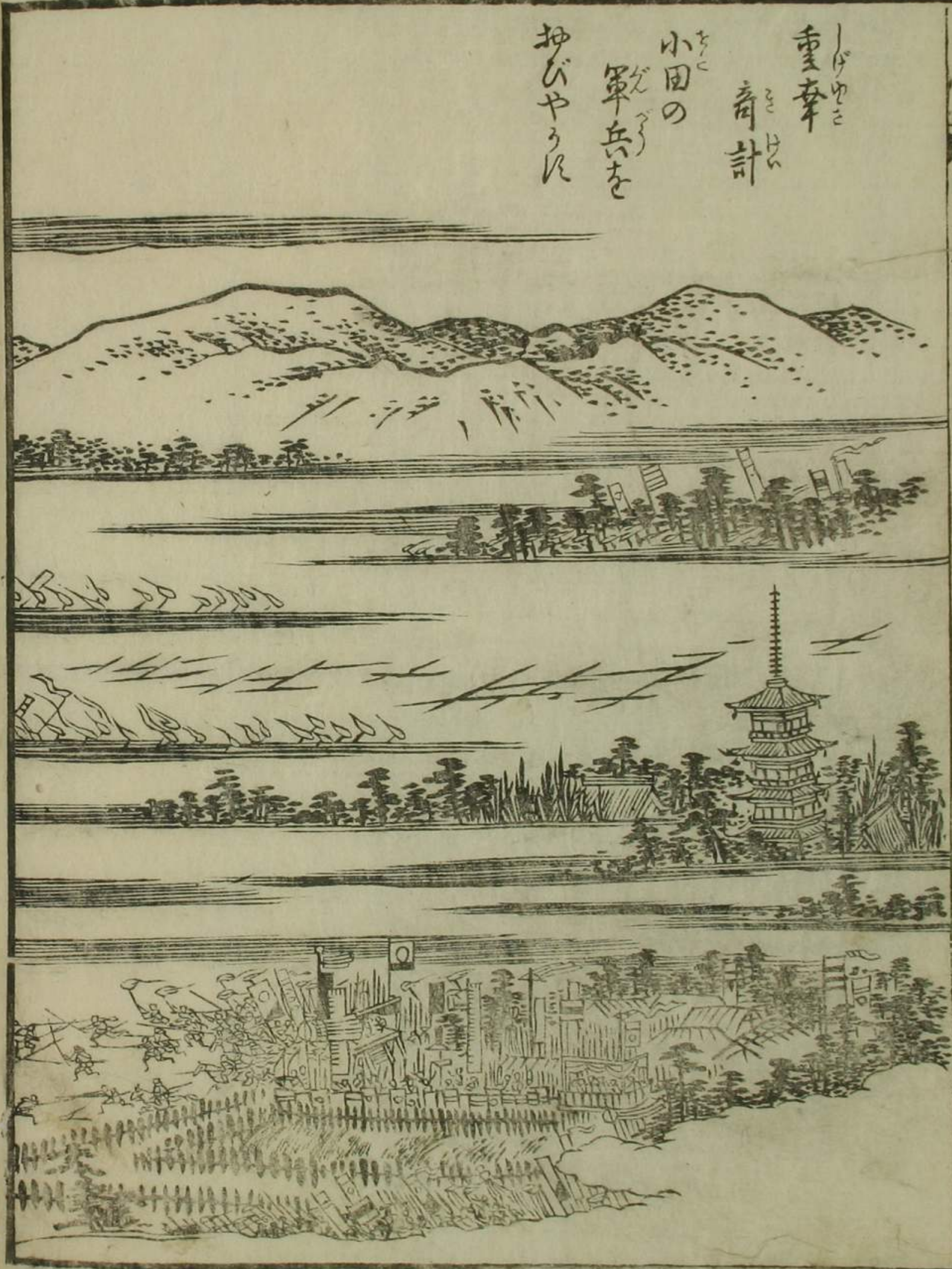


うろく初より守中より新里に大筒石火砲を放ち付けて敵多勢を  
 討散し多勢万允考を盡し妙を多しに御を智て戦ひしに  
 此の大軍合戦毎に敵軍に攻むるを見よるまゝみふ小川分口  
 橋上岸本陣難波控回の若よりかまろく討て出撲獲を入後支討  
 りけ土地案内の若よりなるれい敵より敵に勝て財をもち  
 めはつけりやませい小田勢殆ど戦ひ敵も二先美口を退けよとく  
 多日間右清門の天王寺と陣をた明智十玄清の領吉引退信長御  
 本陣と場へ移さるる軍士の敵を休められしる終本陣  
 幸是と見よる大さ小勢の軍と練る信長も退座して遠く坂と  
 退きよるぞいで敵とよま丘をわし信長とせし小田の若より勝と  
 是とせんと栗津右近より京畿郡最勝郡松舟内記中村の若より

又令じ戦方の長松明を用ゑせしめ安部御街道より赤の方猪飼  
 押合利も栗津田辺の村より怪法相圖と見よ計策とめよとわ知  
 是れは又月七日の夜移し士率引出し出りし相又て赤の若より  
 計略とや令せ下回按察使法橋親龍曰大進曰宮内卿二万余人と  
 引陣し夜は越むるに中夜寺をわで多日間信盛が天王寺の陣  
 を走し周とよめとよげしる信盛といや石山より夜討とよ  
 ぞは多勢の鉄炮の組も多しりゆりおまはして騎馬の武者こそ  
 強例せよと考うるを下知れせとよひうけざる石山は討て我戦て  
 との若よりこととよと強勅に信盛自ら馬と陣取らるりゆり鎗と  
 志が門に馳せしに中夜寺勢二万余人八方より大團と互に鎗と  
 合ひ戦ひしに戦ふよりけ耐道辺に陣を構へし若よりの大勢多



日本書紀卷之...



日本書紀卷之...

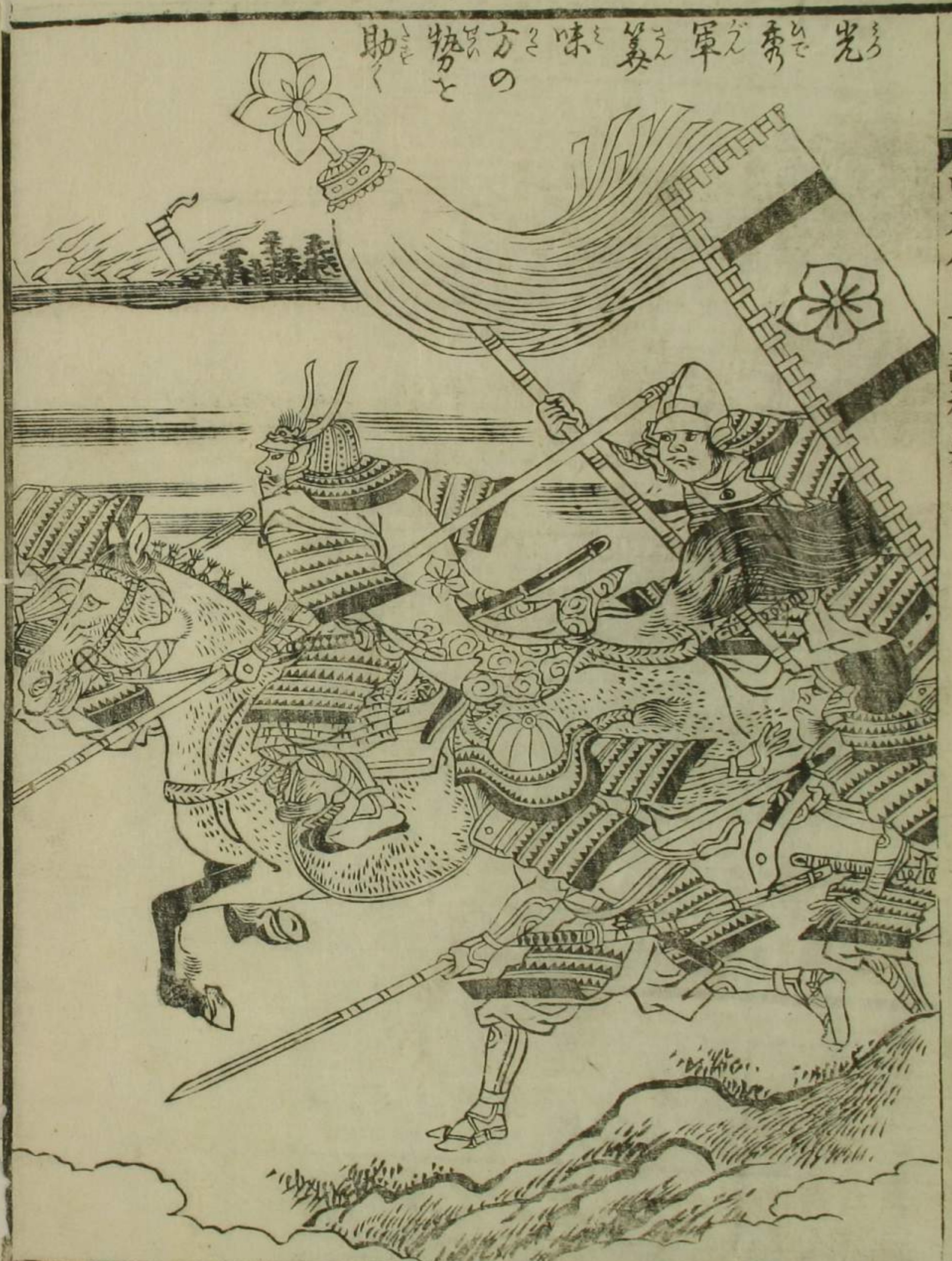


尾右道池田丹波守松永符舟を始りて我もくも馳集り信望  
 かと合せ門徒勢と追ひてしに我も時むりも播合よりし討石  
 山の城中よりお國とあけし狼烟とあけし中へ横倒し  
 しやふ小東の方より出でて敵方の松明一日は焼くつとあけしと國の  
 地よりいし中よりし又狼煙とあけてお國とあせし猪飼村より面造  
 のいより二面は松明と照し南の方へ押まされありとまられば小回勢大に  
 周旋し又いし松永めく謀計は落されしより近國は我い何やまらぬせ  
 そと安部村の石と南へは我先よと引ぬるが門徒勢追討よ  
 切きと討り者殺と知しに討後者の陣を去る明智十玄清  
 光秀遙く松明の光里と見く一万余人の遣兵と率し我ひを助  
 と馬向村まで来りしに本陣難波の村より二三日多く乃史を

照し後者の方へ押来る光秀馬を止めて大に小突し門徒の一撥永  
 兵の勢とばして味方の陣くとあびやうはと見えへより己方の松明何十  
 万ありとも皆敵との計と討て出する敵ありし一子のそとて續く軍  
 勢のさうは月よりある敵はくが只一文字に突崩せと士率と下し  
 て池形むくへ多々同松永符舟が軍勢をさき逃去るを明智  
 十玄清光秀加勢とぞと大に小突り逃る味方と引遠のけ出で  
 向ふをこれに本陣寺の勢二万余りたる軍勢とまらぬ六丁と引り  
 たり光秀怒りて國を焼く返せくと叫りて追うけぬと門徒勢  
 少に敵を寺中へ引ぬる光秀は後方なく天王寺に陣して敵軍と  
 集めたるよ東西の松明次牙は消して星の光をきりしきり同  
 入る若しは小回勢忙死とあきれまごの銘と陣石にえり用心



西ノ馬場



光  
秀  
軍  
の  
味  
方  
の  
物  
助

西ノ馬場

堅固な守りたるを知らず小田三任信長卿去るに月三日より又月下旬  
まじり十余日おとせしむるに本願寺の構堅固にしてるを  
をきりしは信長をんと退し「いかに本願へ退きしを計議と  
めらば」責めし「とて天王寺の陣をま久間信豊守らせ候よし  
其候は明智光秀の命せしむるに樓岸の向ひ城は稲系伊豫守河分  
口の向ひ城は平子監物長柄は荒木攝津守と守らしめ八月廿七日城  
を立てて本願英濃へ移城せしむる

下辻村へ討記之事

け年の秋九月中旬向ふむると本願寺の向ひ城は築りたる平子監  
物稲系伊豫守を知らず本願寺へ軍勢とせし向ひ城は稲系伊豫守  
城中強く要害又五双の石城なりけり度り利と得候事記傷の

若多りたるにむくも急は責めしに附節を結るるをさるる  
むしむる諸方の附城皆永滞候の用意をうけ附し秋の末に  
外回し兵糧は使人と河分は樓岸の向ひ城双方や命せしむる  
軍兵を率し河内の八箇所表は出く田と刈りたる小元来八箇の庄に  
箇の庄は後並の庄は本願寺の門後移しくむる百姓も款方へ  
兵糧を入せしむる本山の難候なりしに偶や退散せしむるに百姓  
一撥と記し集る勢三万余人我先に馳向ひ或は竹槍或は農具を打  
りしむる命惜まば戦ふむる平子監物稲系伊豫守軍勢といひけるに  
を討し防ぎむるに引たりと道はむしむる退討する家より百姓  
かみの若くは中尾隆徳といふ兵ありに天余りの大立ち電光の如く  
お振る群衆たる百姓と花より多し難候し「まじり、内は十月八日



小田原  
 榎並  
 八ヶ村  
 田と  
 川

亂して切立とはいふは勇し一撥方只一人に切立るるに度路より  
 て悪しう門後の中二摂州板並の庄下村に助とらる者太力  
 登りき者るる大弁とおうて指差目かけ死しは指差目を  
 やさしき海づらるまいるは合し哉いしが助が力も終論は  
 てはしもの指差目しはひのきも久らるるきも指差目とあき  
 るれが力をおらりと投捨飛込しといはれしと組討にり助も組討ごん  
 るると曰く矛おもく双方者らぬ大力大兵と踏立ぬ煙と揚て  
 ま附計と組合しが指差目組らるる短刀を引抜助が脇腹に通せし意  
 不和の痛もにひらるるる割勇の若るれはけ方も脇指引抜て指差目  
 胸板と突貫く兩人均しく痛も負ぬあやく夢の雷のてしめり  
 突ふ突合も曰く指差目りらる款も味方何なるの討死やと

言と忠て思とるるが毛より物別しと稱系幸子の両脇外に稱も  
 死得しして向い城と引えたるけ軍が働きよす曰く款方へ外回を  
 らり援解の忠節なりとく取如し人彼門後等とあせり念以  
 度長次「強ひ就中下村の助が働き討死の形勢感歎とるふ終る  
 とく感歎を揚る其の文曰く

去十八日於八箇所表及一戦下过助討死之愴忠節不  
 淡別而不復彼思石の被仰以謹言

天正二年  
 九月廿一日  
 刑部卿法橋教康  
 上野法橋 正身

下过  
 助及跡目は



下<sup>し</sup>村<sup>むら</sup>乃<sup>の</sup>  
助<sup>すけ</sup>  
討<sup>う</sup>  
死<sup>し</sup>

日本傳長言初卷

右の一週今も旗澤下村頼心寺より不持せりけし、而もこの合戦門後  
の討死教をきりて、此上人法のおふ命と捨るを感し、おがし、河  
感状をけし、場より教多きとて、人とも、おに、危せる、押田討死の子孫と  
け下村助子孫の、おふに、おいて、御所講と、号、毎年七月廿八日  
御所相傳を、免し、終、お室永二年、講中の、教、よ、門、け、講、と、二、つ、  
から七月廿八日、押田、三月廿八日、下、方、と、く、例、奉、お山、一、系、  
向、せ、る、お、善、く、人、の、知、る、お、なり

本願寺領頼心國事

加賀國の長亨二年、本願寺門後一樓と、お、國、自、家、撰、女、政、親、  
を、け、し、加、州、一、系、お、本、願、寺、の、不、能、く、なり、お、附、下、同、後、法、橋、松、浦、を、  
彼、法、橋、兩、人、お、本、願、寺、より、加、賀、國、を、い、と、し、守、護、代、り、去、る、頼、心、の、

門後守國の守護、御柱田、御所、守、を、教、し、頼、心、を、お、本、願、寺、へ、持、げ、  
え、と、計、り、り、り、小、糸、の、朝、倉、が、お、居、る、頼、心、六、郎、と、り、若、信、長、と、源、系、  
し、小、田、家、の、下、知、と、稱、し、桂、田、又、代、つ、て、頼、心、の、仗、重、を、お、法、と、お、本、願、寺、門、  
後、多、い、よ、く、お、怒、り、加、賀、の、守、護、代、り、同、後、松、浦、を、彼、よ、御、所、軍、勢、と、  
備、へ、お、回、と、し、り、り、本、願、寺、の、下、知、又、送、り、若、と、信、し、頼、心、と、お、本、願、寺、の、  
御、所、と、り、り、を、お、下、同、松、浦、の、兩、法、橋、大、き、お、教、ひ、七、里、三、河、ち、と、  
り、り、武、勇、の、若、を、大、お、し、頼、心、は、加、賀、兩、國、の、門、後、殿、と、  
集、り、其、勢、院、よ、六、万、余、人、お、長、崎、の、城、を、攻、め、七、郎、を、攻、め、し、ま、お、河、合、  
の、底、乙、部、勤、解、申、た、御、門、が、彼、を、攻、め、其、外、三、國、の、底、は、朝、倉、孫、六、郎、  
斤、山、の、若、光、寺、よ、其、内、之、お、い、り、り、お、花、を、傳、へ、助、多、き、信、意、く、お、教、し、  
勢、ひ、よ、御、所、頼、心、六、郎、と、美、例、と、り、り、和、回、の、本、願、寺、と、先、陣、と、七、里、



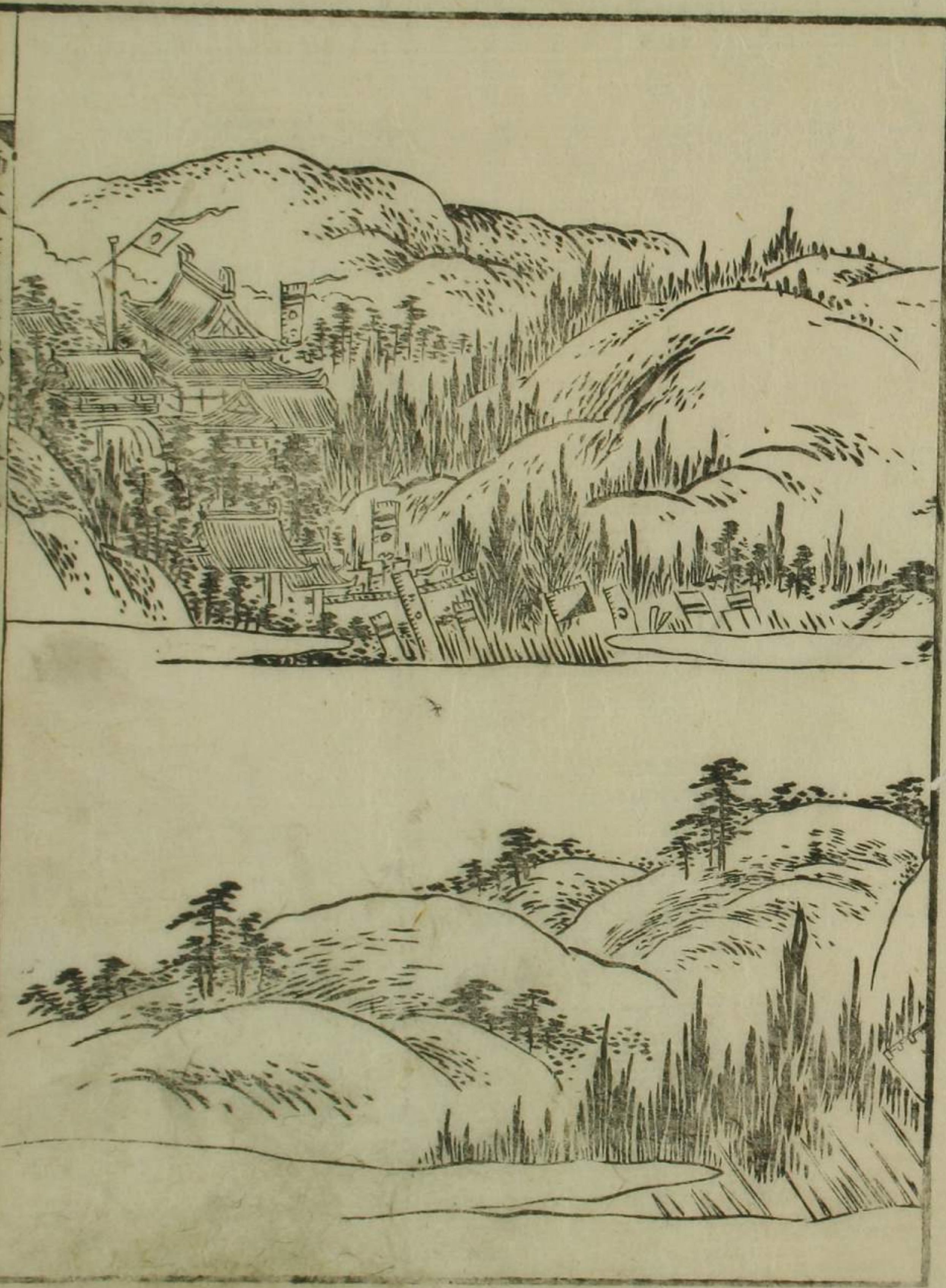
朝倉景鏡  
 忍  
 年  
 又  
 去

日本信長記初巻九



三河守惣大將を府中の城へ押寄せ惣討が向ふ城を築落し城は  
 孫六郎と斬取其勢は寛く利刀の竹と破り修り且唱るる  
 和の國は朝倉義宗の本拠寺の縁者これ義宗が弟と敵  
 信長一味の凶徒と敵して宗右の弟は法慈と附はと宗右は弟集  
 る門後等日毎多く小田方の若く改をう一嵐のどく迎まどく  
 宗右大將郡美山の城を朝倉武部吉実系統の主人義宗を討て信  
 長は降参せし若くはけりをすて大さ小忠は夜中妻を引  
 平泉寺は道と衆徒を斬んと隠居り門後等と争て  
 を平泉寺と表て系統が首を刎よと六万余人の門後平泉寺と  
 十を廿を九回と搦まし美より平泉寺の衆徒等道と  
 ぬありと光昭して三万余人衆敵武部吉実軍配とせ防敵

跡よりびあひの大勢美らぐんを見(る)が中く力攻めせば味方乃  
 人を換はしとと城は討て柵を繕ひ美とと藤向陣と  
 て二月より四月と日毎は仕考敵へともとらぐし軍はは大將七里  
 三河守士率より知し平泉寺の西は出く村園山とつらけ石  
 城と構へ敵城の虚实を見透しうは味方のおは大利なりとて又百餘  
 人の人まをて村園山は城の善法とほむる平泉寺の衆徒等と  
 見てあのお小城と築せうは善法忽ち端るは善法は城せう  
 内は妻よせと退らせとと有り雄の若大衆我もくと地勢は村  
 園山の門後等と火花とらして戦ひは討考の二和和回本覚  
 奔つり合戦のあさまを見く七里三河守は後しうの今村園  
 のの岩と築せが城中の大衆悉く出く合戦は定めて城は互勢



松平泉部寺  
落城



画本信長記秋卷九

ろのどにけしきよきふしてまきまはるはる燃せんり殺ひたりし七里迄を  
 守りてむじ別本光寺と先陣とし三河守の後陣と備人を惣  
 九二万斗平泉寺の西門より五三三三三と美とれりなる遠くはとれ  
 敵中は強き者ハ老僧雅思唱食の難弱き者ハ何の用も  
 なく守り居たりは推し防ぎある者ハ何れも忽西門打破考ひ乃  
 大将現はれ火とりけて焼くる長むじ春澄大師の用基三里に  
 面の佛圖七堂伽藍行耐の烟ととより只一堆の赤土とぬるの池ま  
 しかりあさまきよし村園と入むいれし衆徒多し物のまじり  
 級軍しるもの美徳大坊を門徒の百姓は踏例され愛川源山  
 刀で首と刎らる道々若く稀なる朝倉武部若く是原明と袋田村  
 の郷民室屋らる者ハ首と斬らぬれは本願寺の勢い益々わたり

信長御長崎一揆退治之事

戦一國悉く石丸とゆり撰州石丸よりの下知して陣伏の敵み  
 と大町の手槍守備打ち嶽又和田の平光寺湯尾陣と七里三河  
 守と勢らせ小田の押へし敵軍の守備代ハ下回藤後法橋加賀  
 の政怒ハ坂浦き法橋まきまきと小國都て本願寺の兵團とゆり  
 其勢い激し何れもわたりてわたり

勢州長崎ハ長崎寺を大町とし敵方の門徒多し信長両  
 敵向ありしとつ門とせんぐと斬る林彰三郎氏家ト金の勇士を  
 討ちぬき信長の軍と恐るるは是れにともく孫猛威と震い  
 たる天心二年の秋信長ハ長崎を討ちんとて其勢九万八千人  
 勢とて押切る加賀にハ多々回信盛柴田勝家頼義一



松の  
合戦

日本傳長言初卷九

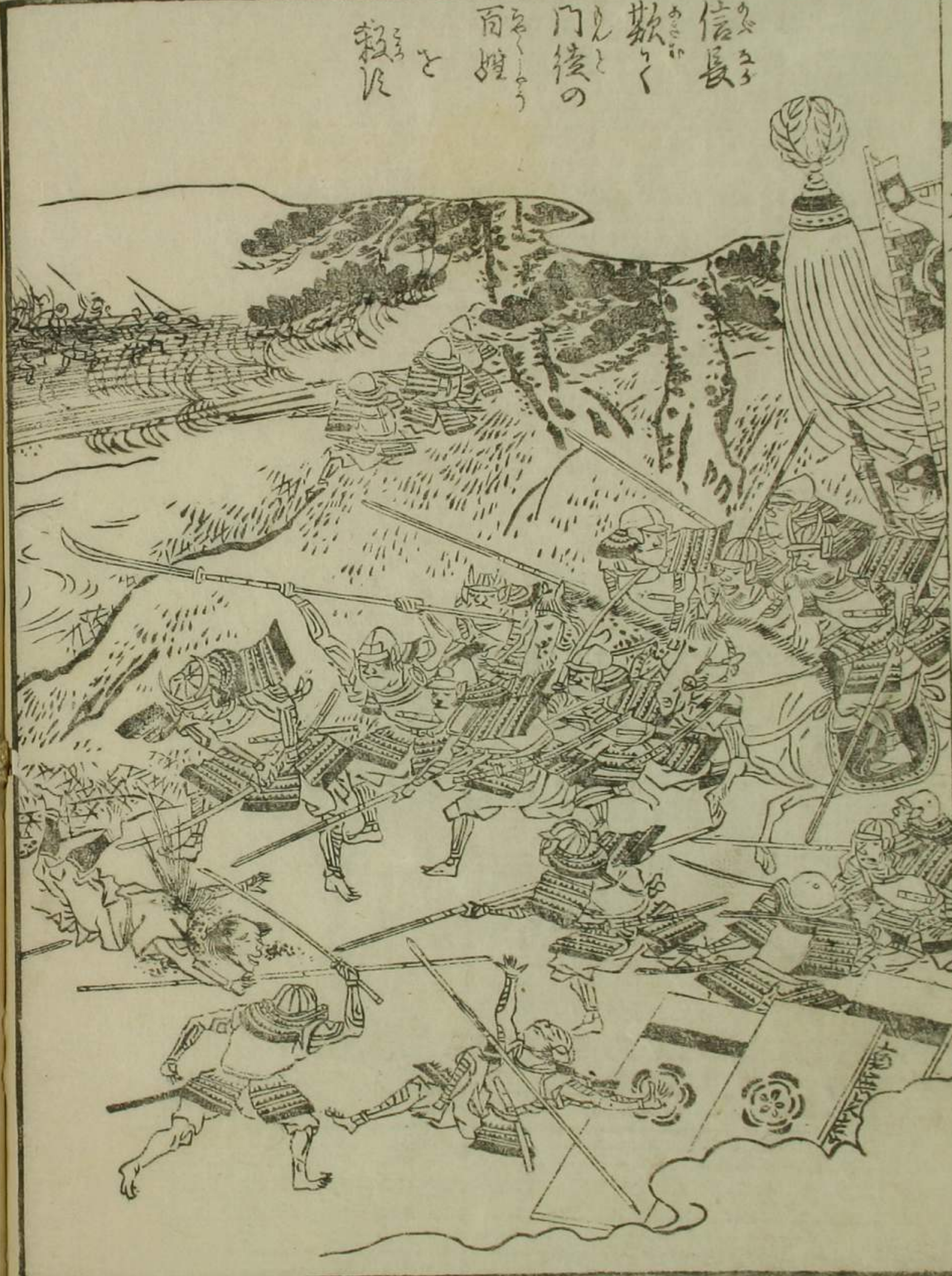
十八

徹峰を於澄多押寄る小松の本り降りて門後を相支(鉄炮  
 を打くる事雨のど)小田勢も負犯人殺多かりとつ(とも事丸  
 せだ古河と候)槍と入(宝崩)門後多殺百人斬捨勢(は  
 殺倒(信長後陣の大軍と候)進(長治の城と雲霞のど)五  
 巻(一揆方の附城篠橋大石居の西面と小田又隅守氏家丸系  
 亮(修賢修賢身飯沼勘平等軍勢を以て五圍を石火砲と赤崩  
 とんぐ)攻(ま)ば城(を)勢(を)門(後)多(殺)あ(れ)お(遠)「降(来)せん」と  
 公(も)信(長)更(よ)由(り)「治(り)だ(か)教(寺)門(後)の(見)懸(せ)よ(一)人(も)お(は)せ  
 ば討(殺)せ(し)と(く)五(二)五(三)は(美)入(西)城(の)男(女)一(五)余(人)切(殺)「懸(勢  
 長(治)は(巻)下(せ)昼(夜)の(分)ち(も)ろ(く)三(日)が(向)水(も)の(う)じ(と)ま(る)ま  
 ら(れ)城(中)大(き)小(庭)は(若)「と(大)お(長)治(寺)俊(若)と(以)て(信)長(へ)や

ろ(れ)我(く)洗(よ)力(盡)落(城)近(く)是(ハ)元(来)城(中)の(男)女(老)若(信)長  
 御(謝)弓(引)い(お)ね(者)と(こ)れ(ろ)く(い)拙(僧)一(人)が(治)り(い)應(じ)是(非  
 の)希(り)ろ(く)若(後)の(り)と(己)即(「勢)城(致)せ(し)若(も)よ(り)の)表(と  
 寛(仁)乃(御)斗(い)を(以)て(拙)僧(希)は(大)お(分)の)若(三)臣(人)自(害)は(其)余  
 の)若(も)助(命)せ(し)と(は)り(せ)く(世)の)仁(慈)忘(る)期(を)そ(く)は(と  
 謹(て)や(ろ)小(信)長(守)て(長)治(寺)が(や)糸(祇)妙(之)お(生)喜(と)遂(げ  
 首(を)出)陣(へ)送(る)也(「城)中(の)男)女(助)命(の)儀)お(遠)る(を)ろ(く)は(と)や(後  
 ら(れ)多(き)は(俊)若(城)中(よ)ろ(り)志(ろ)く(の)中)物(語)と(り)長(治)寺(大)き(拙)僧  
 人(皆)信(長)と(鬼)神(の)ど(く)恐(ろ)き(も)本(石)に(お)ざ(れ)が(仁)毫(の)心(も)ま(き  
 又(つ)は(今)城(中)の)男)女(悉(く)命(と)助(け)お(郷)へ)攻(ろ)く(り)一(方)ろ(く  
 救(惠)と(ろ)く)は(や)け(こ)り(お)ひ)お(は)り(は)「と(く)自(害)して(死)り(り)たり



信長  
歎く  
門後の  
百姓  
と  
殺す



信長  
長  
言  
夜  
九

其余大なるは傍に松島寺信と舟に九郎とまゝなる松文吉はく  
 後撥切てお果々るふ一城の若皆降を流し致うはふものは  
 彼に人が首と先とさげ城門を開き三万又余り門後の田を  
 りくを釋り出南とにして去り去と信長通てより境のよ大勝  
 と埋伏せし又子楯の弓鉄炮を押しらる一度よ門と開放せば  
 安惣や門後乃百姓をら者又應じて三又余人ひさくとお救さる  
 先と見くはる門後乃大さふ怒り石道の信長易中との合戦は得  
 るさで欺く教さんとやとせしかくても記さき命信長は喰付て  
 け眼ととせしやと露羞の者も二又余人信長が隊の中へ面も  
 ろうに切令々命さう又我ひたる元来素肌の百姓をらも死と  
 一致と殺められ其辨先は出りかく小回の軍兵はしらいひて

三丁身引りりるるれども小田方大軍をれば八方より推包と余と  
 じりのと乳とあひ二耐身致し又双方討死を救と知しは中に  
 信長の叔父小田大隅守信廣日一族津田市令助日仙代日又六  
 郎日孫十郎小田守左衛門外換の勇士赤丸左衛門佐佐治八郎  
 坂守七郎左衛門をば「名あ人々三又余人討死」難兵七又余  
 討死し一揆方々悉く討死し後三又余人の討死し一方と  
 切ぬけ又六丁も引ぬらんともふられ鶴毛なる馬と乗る者  
 只一騎採りりへて退りけ既又同道つとされい大者もと今討  
 とはひ津田市令助信成の乳母人余津三郎治郎信長とと者  
 あり討死して主人の津佐中と止しくと呼ぶ向く馬乗る者  
 面もろは一揆の中へ切入りたる教と七八人切伏されとま

の款又切まらさす候くよあまきまらりぐう実凡天晴の別り者  
 り又と款も味方と感トクク愛又好ひく長清落城一揆悉く  
 勢やうれい信長刻龍川一巻をふて長清所守らせ十月又月軍  
 勢とまらり本國又濃又陽城ありたる

繪本拾遺信長記初篇巻之九終



